沖縄県ヤングケアラー実態調査

―概要版―

令和5年3月

沖縄県　子ども生活福祉部　青少年・子ども家庭課

目次

Ⅰ.児童生徒調査

1. 調査概要 ……1
2. ヤングケアラーと思われる子どもの人数(推定) ……2
3. 家庭・家族のことについて ……3
   - 3-1. 世話をしている家族の有無 ……3
   - 3-2. 世話を必要とする家族と世話の内容 ……4
   - 3-3. 世話をしている頻度と時間 ……5
   - 3-4. 世話をしているためにやりたいけれどできないこと ……6
   - 3-5. 世話で感じるつらさ・ストレス ……7
   - 3-6. 進路希望について ……8
   - 3-7. 世話について相談した経験の有無と相談相手、相談しない理由 ……9
   - 3-8. 学校や周りの大人にしてもらいたいこと ……10
4. ヤングケアラーにあてはまるか ……11
5. ヤングケアラーの認知度と認知経路 ……12
6. 自由回答 ……13

Ⅱ.一般県民調査

1. 調査概要 ……15
2. ヤングケアラーについて ……15
   - 2-1. ヤングケアラーの認知度と認知経路、自己認識 ……15
   - 2-2. ヤングケアラーと思われる子どもへの対応と何もしない理由、相談先 ……16
   - 2-3. ヤングケアラーについて相談しやすい環境づくりと自由回答 ……17

1. 調査概要

調査目的

本調査は、県内の児童生徒を対象としたアンケート調査を実施し、ヤングケアラーの早期発見と支援施策等の検討を行うための基礎資料とする

調査対象者

県内の国公私立学校の小学5年生から高校3年生の全ての児童生徒（特別支援学校等を含む） 136，065人

調査方法

各学校を通じて児童生徒向け、保護者向けの調査依頼文を配布し、児童生徒本人がWEBアンケートフォームにて回答
筆記での回答を希望する児童生徒のために、別途、紙媒体の準備

調査期間

令和4年9月12日（月）～10月28日（金）

調査項目

国が令和2・3年度に実施したヤングケアラー関連調査の調査項目を基本としつつ、有識者検討会において、本県独自項目の追加等を行い、小学生（5・6年生）用調査票（28問）、中高生用調査票（30問）を作成

回収状況

回収率40.6% （＝回収総数55,293／調査対象者数136,065人）（調査協力回答数47,180）
※調査協力回答数は、回収総数のうち調査協力意向で「はい」と回答した数（本調査の集計対象）

2. ヤングケアラーと思われる子どもの人数(推定)

- 今回の調査結果を活用して沖縄県独自にヤングケアラーと思われる子どもの人数を推定した。
- 下記の条件設定に基づくと、**「ヤングケアラーと思われる子ども」は小学5年生～高校3年生の児童生徒全体の5.5%(約7,450人)**、その中でも家族の世話により日常生活に影響がでている**「何らかの影響が出ていて、支援が急がれる子ども」は1.8%(約2,450人)**と推定される。

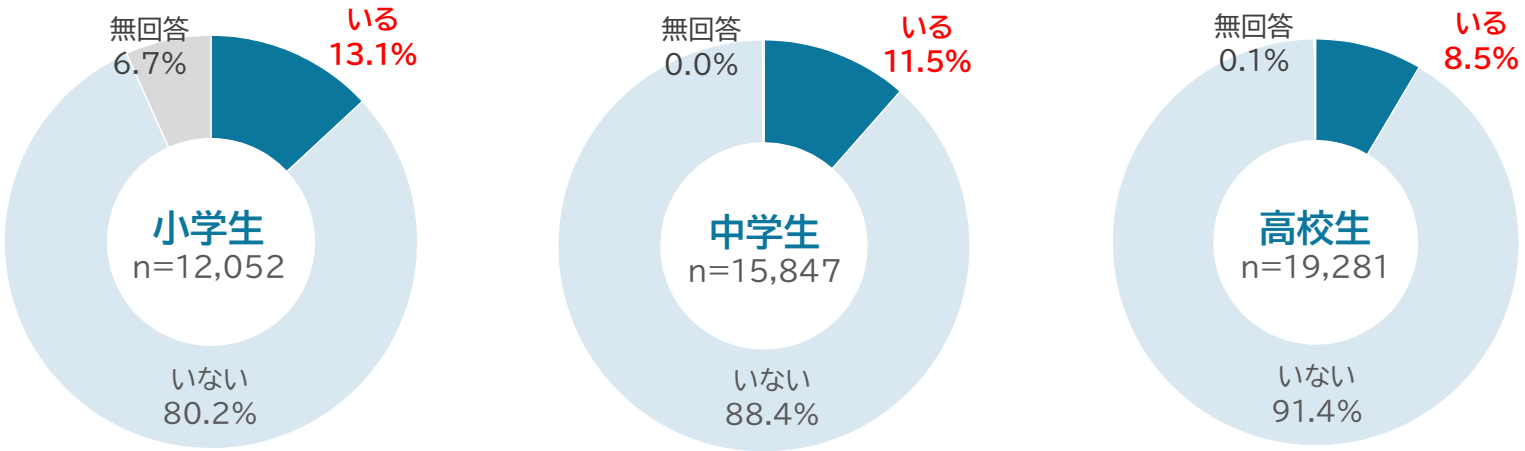
ヤングケアラー定義 (厚労省ホームページ) ↓	児童生徒　全体 (小学5年生～高校3年生) ＜調査結果を用いた条件設定＞	100.0% (136,065人)
本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを	世話をしている家族が「いる」 不定期のもの、比較的軽微なお手伝いの範疇のもの等を含む	世話をしている家族が「いる」子ども 10.7% (約14, 550人)
日常的に行っている子どものことで	家族の世話を ・「週3日以上」行っている、 又は、 ・「週2日以下」だが1日あたり3時間以上行っている	ヤングケアラーと思われる子ども 5.5% (約7,450人)
責任や負担の重さにより、学業や友人関係などに影響が出てしまうことがある	世話をしているためにやりたいけどできないことがある (1つ以上に該当)	うち、 何らかの影響が出ていて、支援が急がれる子ども 1.8% (約2,450人)

※1.上記の条件設定はあくまで調査結果に基づく推定による設定であり、支援の対象を限定するものではありません。
※2.推定数算出においては端数処理等を行っているため、児童生徒全体の人数に割合(%)を乗じた数値とは一致しません。
※3.今回の調査の対象は小学5年生～高校3年生であったため、上記の推定数も小学5年生～高校3年生の児童生徒に関する推定数となっています。

3. 家庭・家族のことについて

3-1. 世話をしている家族の有無

- 『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒は、**小学生の13.1%、中学生の11.5%、高校生の8.5%となり、いずれの学校種別でも全国調査結果と比較して割合が高い。**



世話をしている家族が「いる」児童生徒（全国調査比較）

		小学生	中学生	高校生				合計
				全体	全日制	定時制	通信制	
調査協力回答数（n=）A		12,052	15,847	19,281	18,531	320	154	47,180
『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒	回答数B	1,584	1,830	1, 630	1,500	58	30	5,044
	割合C=B/A	13.1%	11.5%	8.5%	8.1%	18.1%	19.5%	10.7%
全国調査		6.5%	5.7%	-	4.1%	8.5%	11.0%	-

※全国調査は小学6年生、中学2年生、高校2年生を対象とした。
※お世話をしている家族が「いる」と回答した方がヤングケアラーに該当するとは限らない。

3-2.世話を必要とする家族と世話の内容

※『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒の内数

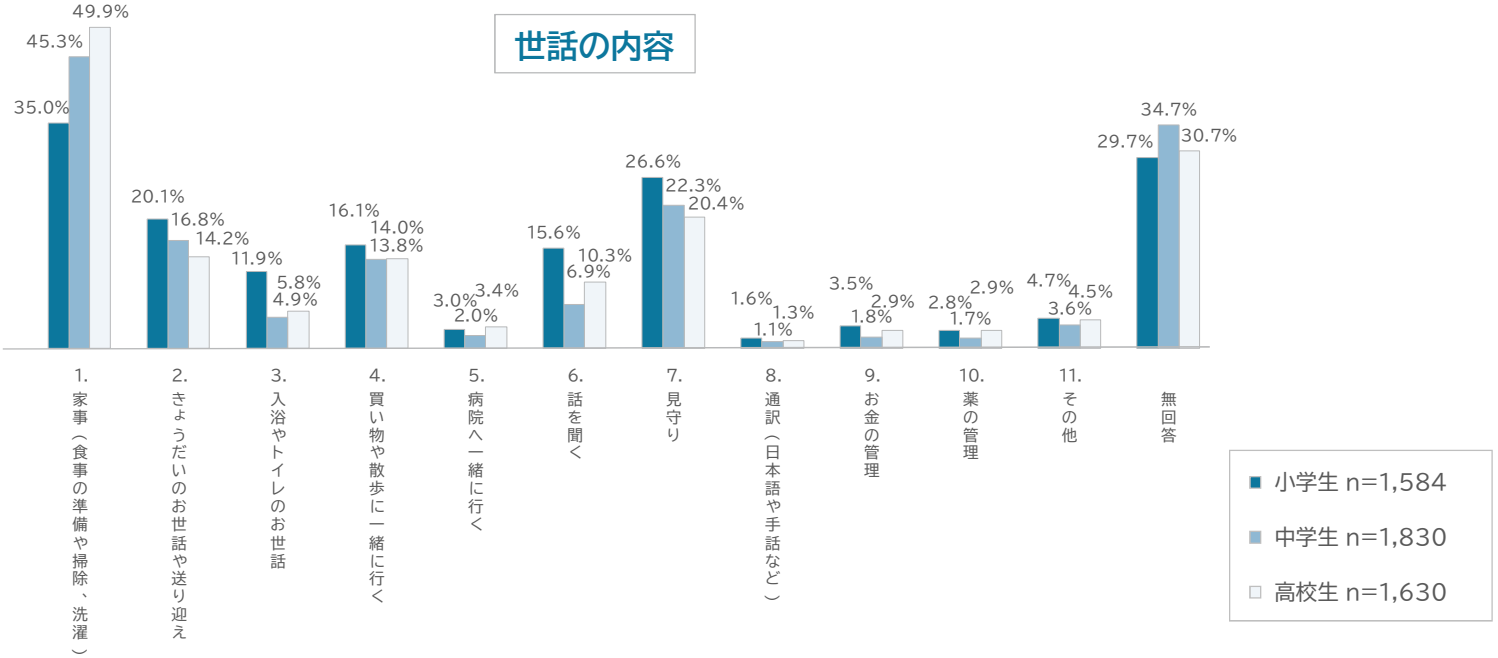
- 世話をしている児童生徒が世話を行っている対象は、**「母親」が5割前後、「きょうだい」が3～5割、「父親」が3割前後となっている。**
- 世話の内容では、「1.家事（食事の準備や掃除、洗濯）」が3～5割前後と最も高く、次いで「7.見守り」「2.きょうだいのお世話や送り迎え」と続く。

世話を必要とする家族

（%）

	母親	父親	祖母	祖父	きょうだい	その他	無回答
小学生（n＝1,584）	47.1	33.4	17.2	10.0	48.5	4.0	12.1
中学生（n＝1,830）	52.7	35.1	14.5	7.9	39.8	3.8	13.7
高校生（n＝1,630）	50.6	28.8	14.5	7.6	35.7	5.0	12.8

世話の内容



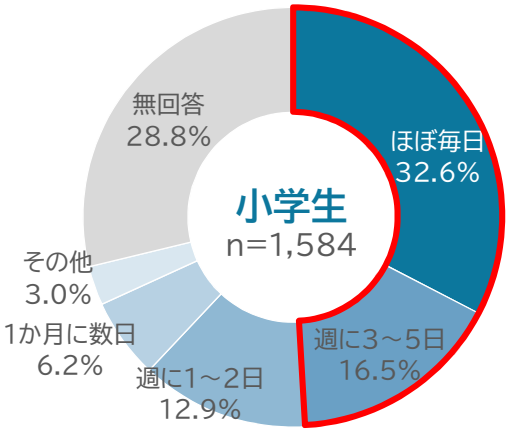
3-3.世話をしている頻度と時間

※『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒の内数

- 世話をする児童生徒の**4～5割が「週3日以上」家族の世話をしており、時間を見ると、平日では2～3時間、休日は4時間強となっている。**

頻度

「週3日以上」
49.1%



時間

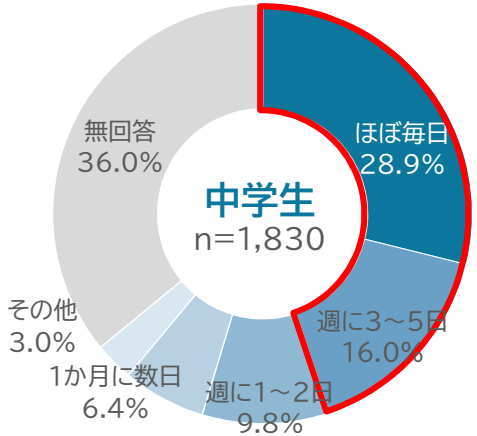
(%)

	平日	休日
3時間未満	40.1	26.8
3～7時間未満	16.8	23.0
7時間以上	3.3	12.4
無回答	39.8	37.8
3時間以上計	20.1	35.4

	平日	休日
平均(時間)	2.47	4.55

頻度

「週3日以上」
44.9%



時間

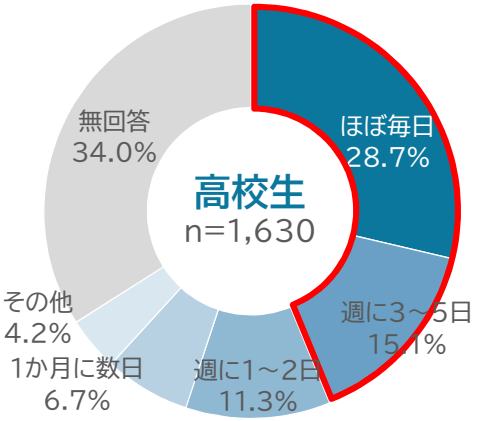
(%)

	平日	休日
3時間未満	35.7	26.7
3～7時間未満	12.0	16.1
7時間以上	3.8	9.5
無回答	48.5	47.8
3時間以上計	15.8	25.6

	平日	休日
平均(時間)	2.71	4.34

頻度

「週3日以上」
43.8%



時間

(%)

	平日	休日
3時間未満	29.8	24.0
3～7時間未満	13.8	15.9
7時間以上	3.6	8.5
無回答	52.8	51.5
3時間以上計	17.4	24.4

	平日	休日
平均(時間)	3.08	4.29

3-4.世話をしているためにやりたいけれどできないこと

※『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒の内数

- 世話をしている児童生徒の**2割程度は、世話をしているためにやりたいけれどできないことが「ある」**と回答している。
- その内容として、**「9.自分の時間」「5.睡眠時間」「3.勉強時間」の不足に関することが6～10%程度**となっている。

（%）

	「あり」計	1 学校に行きたくても行けない	2 どうしても学校を遅刻・早退してしまう	3 宿題をする時間や勉強する時間が取れない	4 学校の行事や活動に参加できない	5 睡眠が十分にとれない	6 友人と遊ぶことができない	7 部活動や習い事ができない、もしくはやめなければならなかった	8 進学先や就職などの進路の変更を考えないといけない、または進路を変更した	9 自分の時間が取れない	10 その他	特にない	無回答
小学生（n=1,584）	**20.2**	1.3	3.0	6.4	1.2	6.6	4.5	0.9		9.3	1.1	52.5	27.3
中学生（n=1,830）	**18.2**	1.0	1.6	6.9	1.0	6.3	6.6	1.1	1.3	7.9	0.4	49.6	32.2
高校生（n=1,630）	**22.4**	1.8	2.8	7.4	1.7	9.0	7.7	1.8	2.8	10.2	0.7	46.1	31.5

※小学生と中学生・高校生は一部選択肢が異なる。「進路～」は中学生・高校生のみの選択肢。　※「あり」計 は全体（100%）-「特にない」「無回答」を除いた比率

3-5.世話で感じるつらさ・ストレス

※『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒の内数

- 家族の世話している児童生徒の2割以上が、世話の大変さを実感しており、**「精神面」の割合が高く、次いで「時間面」、「体力面」となっている。**
- 感じる大変さ・ストレスの強弱をみると、**「中くらい」から「大きい」の割合が高くなっている。**

世話で感じるつらさ・ストレス

(%)

	「実感あり」 計	体力面	精神面	時間面	特に感じていない	無回答
小学生(n=1,584)	**25.2**	9.7	11.9	11.6	43.4	31.4
中学生(n=1,830)	**20.0**	6.8	12.4	9.3	44.6	35.4
高校生(n=1,630)	**23.4**	8.7	14.8	11.2	42.2	34.4

※「実感あり」 計 は全体(100%)-「特にない」「無回答」を除いた比率

体力面・精神面・時間別の大変さ・ストレスの強弱

小学生

(%)

	体力面 (n=154)	精神面 (n=189)	時間面 (n=183)
小さい	17.5	7.9	13.1
やや小さい	24	13.8	23.5
中くらい	32.5	31.7	24.6
やや大きい	8.4	21.2	22.4
大きい	13	19.6	13.1
無回答	4.5	5.8	3.3

中学生

(%)

	体力面 (n=125)	精神面 (n=227)	時間面 (n=171)
小さい	10.4	6.6	2.9
やや小さい	16	11.5	18.1
中くらい	45.6	29.1	36.3
やや大きい	16.8	26.4	21.6
大きい	6.4	22.9	15.2
無回答	4.8	3.5	5.8

高校生

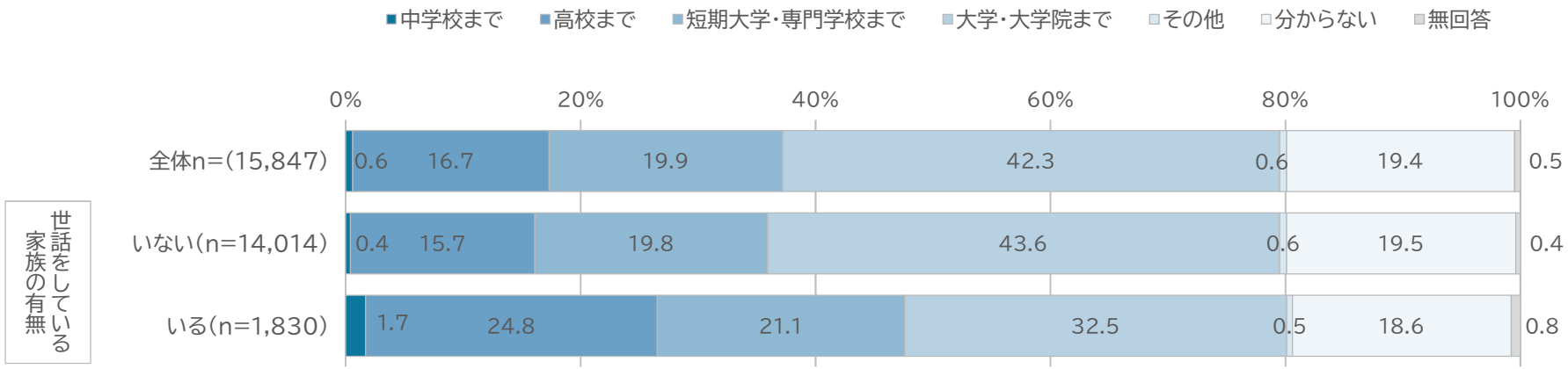
(%)

	体力面 (n=141)	精神面 (n=242)	時間面 (n=182)
小さい	5.7	3.7	2.7
やや小さい	10.6	5.4	6.6
中くらい	24.1	21.9	23.1
やや大きい	12.1	20.7	13.2
大きい	16.3	20.2	21.4
無回答	31.2	28.1	33

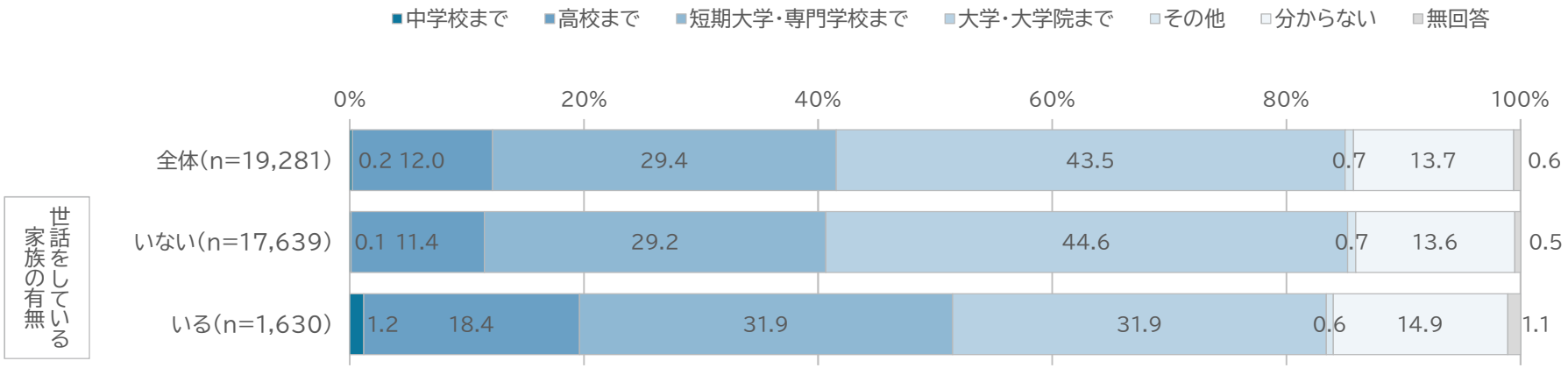
3-6. 進路希望について

- 進路希望について、**お世話をしている家族が「いる」と回答した生徒は、「いない」と比べて「高校まで」と「短期大学・専門学校まで」の割合が高く、「大学・大学院まで」の割合が低くなっている。**

中学生



高校生



3-7.世話について相談した経験の有無と相談相手、相談しない理由

※『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒の内数

- **世話について相談経験が「ある」児童生徒は2割弱**であり、相談経験が「ない」児童生徒のうち、**世話について話を聞いてくれる人が「いる」児童生徒は5割前後**である。
- 相談しない理由については、**中高生ともに「1.相談するほどの悩みではない」が最も高い。また、中高生では「10.相談したいと思わない」が1割程度**占めている。

世話について相談した経験の有無

(%)

	ある	ない	無回答
小学生(n=1,584)	16.9	71.0	12.1
中学生(n=1,830)	17.5	73.2	9.3
高校生(n=1,630)	19.8	69.0	11.2

(相談経験がない場合)世話について話を聞いてくれる人の有無

(%)

	いる	いない	無回答
小学生(n=1,125)	53.7	28.7	17.6
中学生(n=1,339)	45.6	32.9	21.6
高校生(n=1,125)	45.5	31.3	23.2

相談しない理由

(%)

	1 誰かに相談するほどの悩みではない	2 家族以外の人に相談するような悩みではない	3 誰に相談するのがよいかわからない	4 誰かに相談したいが、相談できる人が身近にいない	5 誰かに相談したいが、家族のことのため話しにくい	6 家族のことを知られたくない	7 家族に対して偏見をもたれたくない	8 誰かに相談したいが、家族から他人に相談しないように言われている	9 誰かに相談したいが、家族に対していやな思いを持たれたくない	10 相談したいと思わない	11 相談しても状況が変わるとは思わない	12 その他	無回答
小学生(n=1,125)	57.1		4.9	3.6	4.5			0.6	5.4		11.0	9.7	19.9
中学生(n=1,339)	46.9	7.6	4.6	1.9	2.8	3.1	3.6	1.0	2.7	16.7	8.8	8.4	26.4
高校生(n=1,125)	46.7	6.9	4.6	2.2	3.3	3.5	3.7	1.0	2.2	14.6	9.7	8.3	24.7

3-8.学校や周りの大人にしてもらいたいこと

※『世話をしている家族が「いる」』と回答した児童生徒の内数

- 学校や周りの大人にしてもらいたいことについて「13.特にない」「無回答」を除くと、**小学生では「7.自由に使える時間がほしい」が17.2%で最も高く**、次いで**「1.自分のいまの状況について話を聞いてほしい」が9.7%であった。**
- **中高生では、「1. 自分のいまの状況について話を聞いてほしい」が最も高く**、次いで**「7.自由に使える時間がほしい」であった。**

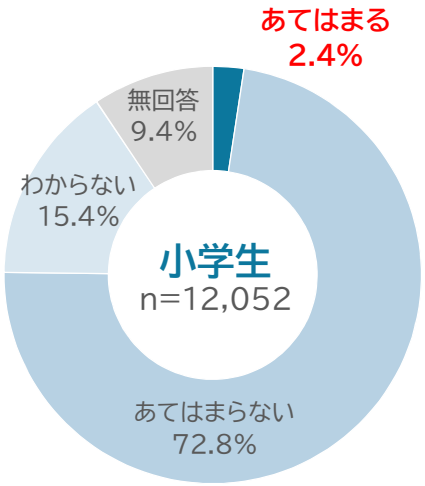
（%）

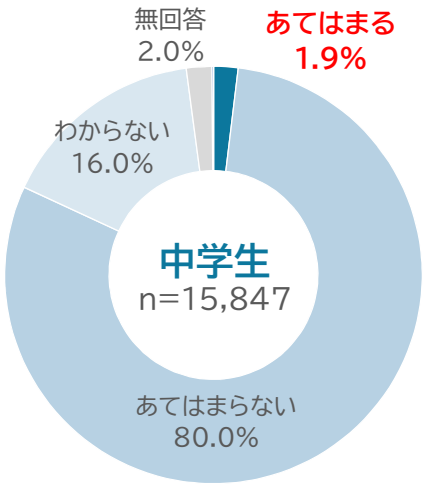
	1 自分のいまの状況について話を聞いてほしい	2 家族のお世話について相談にのってほしい	3 家族の病気や障がい、ケアのことなどについてわかりやすく説明してほしい	4 自分の行っているお世話(ケア)のすべてを代わってくれる人やサービスがほしい	5 自分の行っているお世話(ケア)の一部を代わってくれる人やサービスがほしい	6 家族が適切な治療や介護保険サービスを受けられるよう手続きをしてほしい	7 自由に使える時間がほしい	8 進路や就職など将来の相談にのってほしい
小学生(n=1,584)	9.7	3.0	1.4	3.3	4.2		17.2	
中学生(n=1,830)	7.7	2.5	1.3	1.5	1.6	0.9	7.1	4.9
高校生(n=1,630)	8.0	2.3	3.0	2.1	2.3	2.1	7.2	5.6

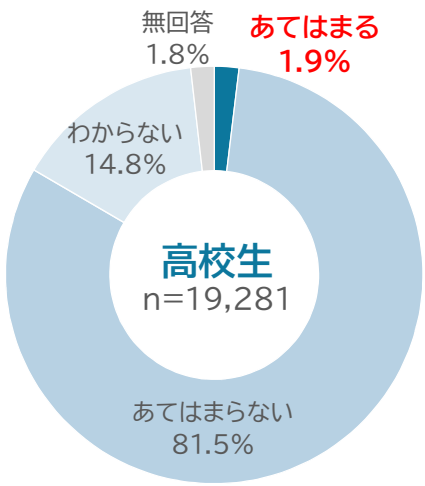
	9 自分と同じような状況の人と話をして悩みを共有する場がほしい	10 学校の勉強や受験勉強など学習をサポートしてほしい	11 収入が少ないので経済的な援助(サポート)をしてほしい	12 その他	13 特にない	14 わからない	無回答
小学生(n=1,584)		9.1	4.0	1.1	42.9	8.2	21.1
中学生(n=1,830)	3.1	5.7	1.8	0.5	47.8	10.4	22.5
高校生(n=1,630)	3.1	5.0	5.6	1.3	40.1	12.6	26.1

4. ヤングケアラーにあてはまるか

- 「ヤングケアラーにあてはまる」と回答した児童生徒は、**小学生の2.4%、中学生の1.9%、高校生の1.9%**となっている。
- **全国調査結果と比較してほぼ同等である。**







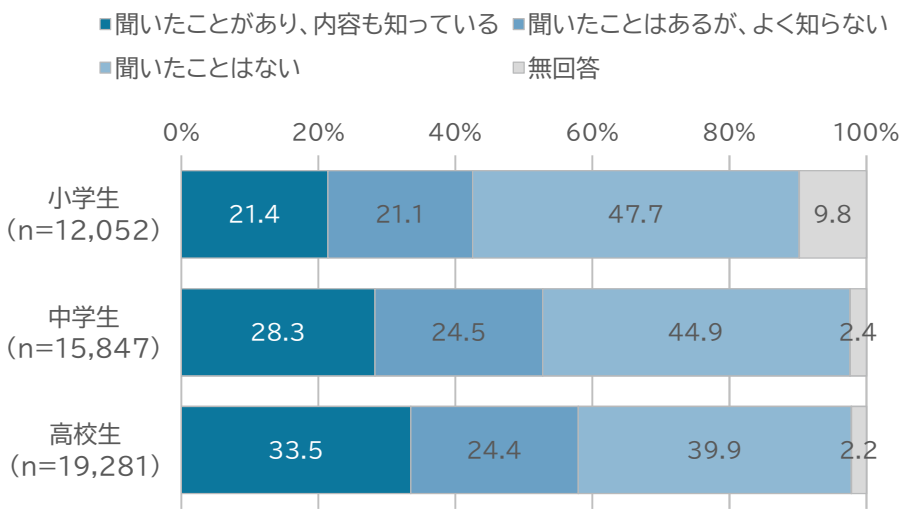
ヤングケアラーに「あてはまる」と回答した児童生徒（全国調査比較）

		小学生	中学生	高校生				合計
				全体	全日制	定時制	通信制	
調査協力回答数（n=）A		12,052	15,847	19,281	18,531	320	154	47,180
『ヤングケアラーに「あてはまる」』と回答した児童生徒	回答数B	289	301	366	330	23	12	957
	割合C=B/A	2.4%	1.9%	1.9%	1.8%	7.2%	7.8%	2.0%
全国調査		–	1.8%	-	2.3%	8.5%	11.0%	-

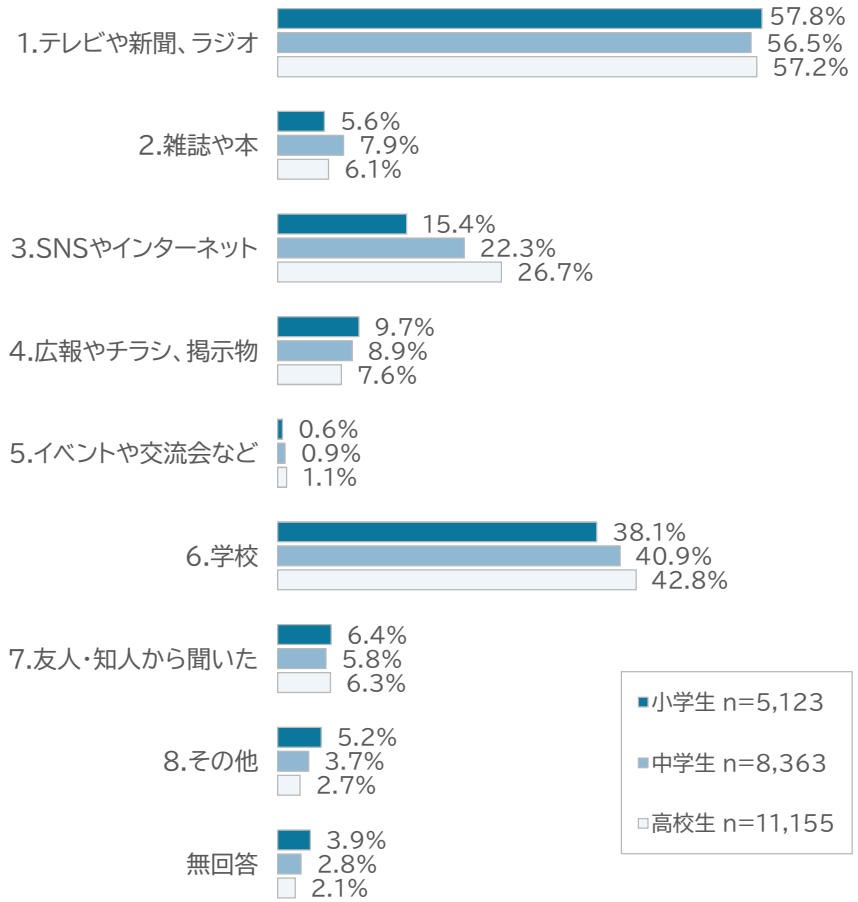
5. ヤングケアラーの認知度と認知経路

- 「ヤングケアラー」という言葉について**「聞いたことがあり、内容も知っている」「聞いたことはあるが、よく知らない」の合計は、4～6割前後**となっており、**学年が上がるほど「言葉」だけでなく「内容」の認知度も高まっている。**
- 認知経路について、「テレビや新聞、ラジオ」といったマスメディアで高く、次いで「学校」が4割、「SNSやインターネット」が2割前後と続く。

認知度



認知経路



6.自由回答①

- 「ヤングケアラーを支援していくために必要だと思うことや、大人にしてほしいと思うこと」について、自由回答を14分類に分け、整理分析を行った。**小学生では、「5.助け合い・気遣い・思い合い（ボランティア）」の割合が高く、中高生では「経済的支援」に関する回答の割合が高い。**

小学生n=4,326　中学生n=3,668　高校生n=3,674

分類	対象	（%）	回答内容
1. 自由な時間がほしい	小学生	2.9%	■ いつも私が妹にしていることをすべて変わってもらい自分に自由な時間がほしい。（小学生）
	中学生	0.7%	
	高校生	1.0%	
2. （当人側から）話せる場所と人を作る	小学生	19.2%	■ 先生が否定せずに、親身に聞いてほしい。自分だって、やりたくて、やっているわけではなく、まだ、学生である私たちは、役所に行く。とか、病院に行くとか。車がないので、連れて行くことができない。そんな時に繋がるイベントがほしい。頼れる大人がほしい。（高校生） ■ 電話相談が多いけど、親とか周りの人に聞かれたくないし相談してることも知られたくないのでできればメール、DMで話したい。（中学生）
	中学生	15.2%	
	高校生	14.1%	
3. （支援側から）周りが気づいて、声をかける	小学生	5.0%	■ 学校の先生や周りの大人が家庭の状況を知ることが大事だと思う。あとは、自分の場合、家族の病院付き添いで学校を早退することが多い。しかし、先生には家庭のこと言えないから「通院しているので早退します。」って言うことが多い。本当は自分自身は通院していないけれど、家族の病院付き添いをやらないといけないから、嘘をつかないといけない。また嘘をついたことに対しても心が苦しい。（高校生）
	中学生	7.4%	
	高校生	7.7%	
4. 助けたい・手伝いたい	小学生	7.2%	■ もし、友達がヤングケアラーだったら勉強を教えたり、自分ができることをしたりします。（中学生）
	中学生	1.7%	
	高校生	1.0%	
5. 助け合い・気遣い・思い合い（ボランティア）	小学生	33.0%	■ 将来、福祉での貢献を目指している人が集まる団体（学校やボランティアとか）で、ヤングケアラーをサポートする実習などが増えてもいいと思った。（高校生）
	中学生	20.4%	
	高校生	16.5%	
6. 勉強を教え生活を支援してくれる大人がほしい（物資、ご飯、家事、代行）	小学生	25.6%	■ 誰かに手伝ってもらったり、自分1人の時間を作ってあげることも大切だと思う！ひたすら、看病とかだけだと自分の負担も多くて、学校の授業とかにもついていけなくなるから、学校には行かせてあげられるようにする！（中学生）
	中学生	14.1%	
	高校生	12.4%	
7. 家庭へ経済的な支援をする（給付金・学費・光熱費など）	小学生	10.1%	■ 経済的支援が1番だと思う。でも、自分が考えている経済的支援は将来返さないといけないやつではなく、返さなくてもいい支援金がいいと思う。（高校生）
	中学生	27.8%	
	高校生	27.0%	

6.自由回答②

分類	対象	(%)	回答内容
8. 福祉の支援(介護など)	小学生	8.3%	■ 老人ホーム等の福祉施設に預ける手続きを未成年でもやりやすいようにできる政策を、取って頂きたいです。(高校生)
	中学生	11.8%	
	高校生	9.7%	
9. 本人の気持ちに寄り添う	小学生	5.1%	■ 保護者や同居者に病気の方などがいた場合、市役所などの方が定期的に訪問して子供から話を聞いたり、子供のメンタルケアをする機会を設ける。(高校生)
	中学生	2.5%	
	高校生	1.4%	
10. ヤングケアラーの理解を深める	小学生	2.5%	■ 少しでもいいからヤングケアラーは大変だという事を大人や学校の子達にも知って欲しい。(中学生)
	中学生	10.9%	
	高校生	14.3%	
11. ヤングケアラーの生活状況や不安を知る	小学生	2.9%	■ ヤングケアラーの人たちは、自分ではヤングケアラーとは思ってないと思うので、小学生とかが家庭訪問するみたいに中高生になっても、家庭訪問みたいなのがあってもいいのかなと思います。(中学生)
	中学生	4.8%	
	高校生	3.9%	
12. 学校に求めること等	小学生	11.1%	■ 気軽に先生や信頼できる大人に相談することが必要だと思う。(中学生) ■ 先生が生徒一人一人のことをよく観察し、上辺だけの笑顔ではないかなど、きちんと判断することが大切だと思います。また、学級にひとつの箱を置き、ヤングケアラーの人が困った時はそれで相談すると良いと思います。(中学生)
	中学生	7.4%	
	高校生	7.2%	
13. わからない	小学生	5.3%	■ わからない。
	中学生	7.6%	
	高校生	6.0%	
14. その他	小学生	1.4%	■ ヤングケアラーとかって周りにバレたくない。(高校生) ■ あまりヤングケアラーのことはわからないけれど、自分からではなくて、見ていておかしい所や気持ちがいつもと違うときは声をかけて、言いやすくしてほしいです。(中学生)
	中学生	10.6%	
	高校生	9.9%	

※児童生徒からの自由回答部分である「回答内容」に記入された意見等について、原則、原文を掲載しております。

Ⅱ. 一般県民調査

1.調査概要

調査対象者

WEBアンケート会社にモニター登録している
県内在住20代以上の男女

調査方法

インターネットWEB調査

調査期間

令和4年8月22日(月)～8月25日(木)

調査回収数

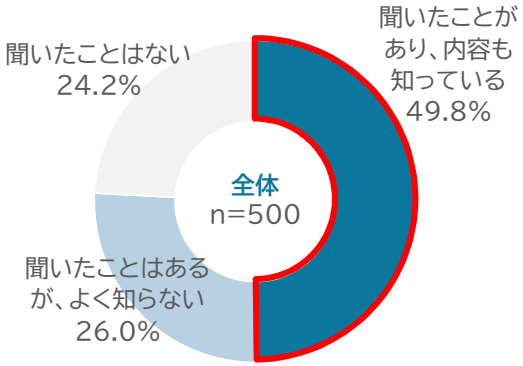
500人
(20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代以上の
年齢5区分ごとに100人ずつ割付)

2. ヤングケアラーについて

2-1. ヤングケアラーの認知度と認知経路、自己認識

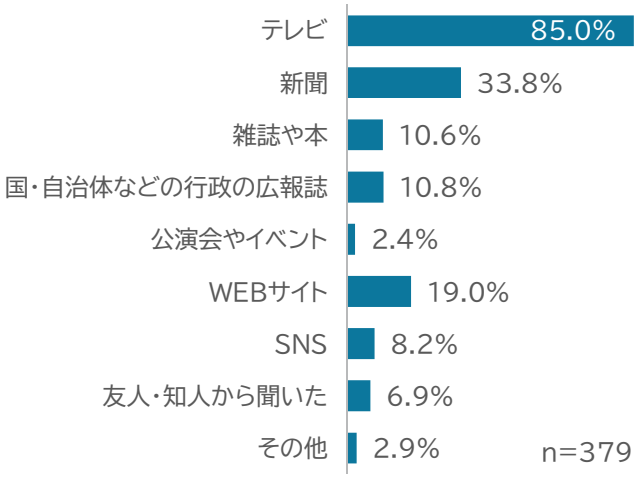
- **「ヤングケアラー」の「内容」まで知っているのは5割を占めており、言葉を「聞いたことがあるが、よく知らない」と合わせた認知度は75.8% となっている。**
- 認知経路は**「テレビ」が最も高く**、次いで「新聞」「WEBサイト」といったマスメディアと続く。
- ヤングケアラーの自己認識について、**「かつてそうであり、今現在も続いている」、「かつてはそうであったが、今現在はそうではない」を合わせた割合は8.8%となっている。**

認知度

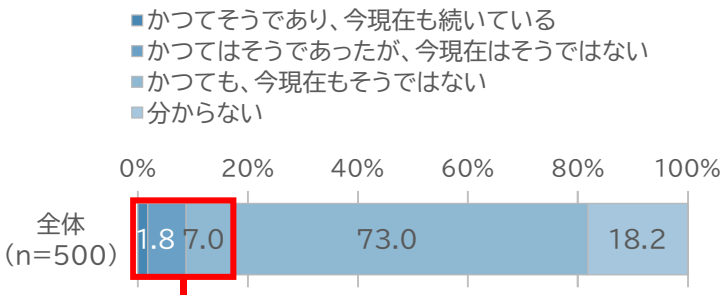


75.8%が「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがある

認知経路



自己認識



8.8%
「かつてそうであり、今現在も続いている」
＋
「かつてはそうであったが、今現在はそうではない」

2-2. ヤングケアラーと思われる子どもへの対応と何もしない理由、相談先

- 周囲にヤングケアラーと思われる子がいた場合の対応では、**「本人に様子を聞く」が36.3%と最も高く、「関係機関に相談する」が32.6%、「わからない」が30.5%**なっている。
- 「何もしない」と回答した理由としては、**「家庭の問題に関わることへの抵抗感」が最も高く**なっている。
- ヤングケアラーに関する相談機関では**「児童相談所など」と「福祉事務所等」の子どもや福祉に関する機関が5割強**となる。

対応

(%)

	関係機関に相談する	家族、知人、友人に相談する	本人に様子を聞く	何もしない	わからない	その他
沖縄県(n=482)	32.6	24.3	36.3	10.4	30.5	0.4
全国調査(n=2,357)	22.1	17.1	23.3	16.2	39.9	0.5

何もしない理由

(%)

	どのように対応したらよいかわからないため	家庭の問題に関わることに抵抗感があるため	家族が家族の世話をすることは当たり前であるため	相談する余裕がないため	その他
沖縄県(n=50)	24.0	28.0	12.0	26.0	10.0
全国調査(n=382)	30.6	29.1	9.9	27.7	2.6

※家族・親族にヤングケアラーと思われる子が「いない」「わからない」と回答した者のみが回答。

相談先

(%)

	学校や教育委員会	民生委員・児童委員	児童相談所などの子どもに関する行政の相談機関	保健所などの健康・衛生に関する行政の相談機関	福祉事務所などの社会福祉に関する行政の相談機関	病院や介護事業所などの医療・介護関係機関	フリースクール・子ども食堂などの民間団体	警察	わからない	その他
沖縄県(n=157)	42.7	38.9	54.8	24.2	53.5	7.0	8.9	3.2	5.7	0.6

2-3. ヤングケアラーについて相談しやすい環境づくりと自由回答

- 相談しやすい環境づくりでは、**『1.「ヤングケアラー」専用の相談窓口があること』で54.6%と割合が最も高く**、次いで**『6.電話・メール・SNSでの相談が可能であること』**となっている。
- 自由回答をみると、**「8.福祉の 支援(介護など)」の割合が高く**、次いで**「2.(当人側から)話せる場所と人を作る」、「3.(支援側から)周りが気づいて、声をかける」**となっている。

ヤングケアラーについて相談しやすい環境づくり

(%)

1	「ヤングケアラー」専用の相談窓口があること	54.6
2	学校に相談窓口があること	36.2
3	自治体の役所等の行政機関に相談窓口があること	34
4	「学校」、「自治体の役所等の行政機関」以外の専門機関に相談窓口があること	19.4
5	対面での相談が可能であること	17.2
6	電話・メール・SNS での相談が可能であること	40.6
7	24時間いつでも相談が可能であること	39.2
8	相談する際の手順や判断基準がわかりやすいこと	33.6
9	相談がどのような支援につながるかがわかりやすいこと	36.2
10	「ヤングケアラー」の支援に関する法律や条例があること	25.2
11	その他	0.4
12	特にあてはまるものはない	20.2

自由回答

＜カテゴリー分類分析＞ (%)

1	自由な時間がほしい	1.9
2	(当人側から)話せる場所と人を作る	11.5
3	(支援側から)周りが気づいて、声をかける	11.1
4	助けたい・手伝いたい	2.2
5	助け合い・気遣い・思い合い(ボランティア)	4.0
6	勉強を教え生活を支援してくれる大人がほしい(物資、ご飯、家事、代行、自由時間)	9.3
7	家庭へ経済的な支援をする(給付金・学費・光熱費など)	3.7
8	福祉の支援(介護など)	12.4
9	本人の気持ちに寄り添う	2.5
10	ヤングケアラーの理解を深める	9.3
11	ヤングケアラーの生活状況や不安を知る	2.2
12	学校に求めること等	3.4
13	わからない	9.9
14	その他	16.7

＜主な回答＞ 全体n＝359

2	(当人側から)話せる場所と人を作る	気づきにくいことも多いので、本人から声をあげられる様に知識や、周りが少しでも気になったときに気軽に相談できる環境がほしい。
3	(支援側から)周りが気づいて、声をかける	家の手伝いの範囲を超えて、子供の成育を妨げるものだと思う。身近な人が気づいて声をかけることが大事。
8	福祉の支援(介護など)	普通の子のように当たり前に学校に通えて、勉学もできて進学もできること。そのためには学校や行政が相談しやすい環境を作ったり、スピーディーに動ける体制を整えておくこと。
14	その他	子供が本来受けられるべき平等な教育も、満足に受けられない環境にあり、心身共に子供らしさを奪う環境にあると思う。

沖縄県ヤングケアラー実態調査報告書
―概要版―

令和5年3月
沖縄県　子ども生活福祉部　青少年・子ども家庭課